

RILAC NEWS

No. 11

2012 / 12

公益財団法人荒川区自治総合研究所
(Research Institute for Local government by Arakawa City)

区と地域の皆様が一体となって幸福を

理事長(荒川区長) 西川太一郎

荒川区では、区民の幸福実感を目指した区政を実現すべく、全国に先駆けて幸福度の研究に取り組んでいます。この度、「荒川区民総幸福度(GAH)に関する研究プロジェクト第二次中間報告書」を公表しました。

この報告書では、荒川区基本構想に定める6つの都市像の指標案をお示しするとともに、その指標を政策・施策の立案や改善につなげていく方法についても提示しました。何が幸福につながるかは人によって違いがあり、またその時の気分にも左右されるため、その分析は非常に難しいものですが、区民の皆さんの幸福実感の向上のために必要な取り組みであると考えます。

荒川区民総幸福度(GAH)には、幸福度の指標化の側面にあわせて、運動の側面もあります。運動とは、区に関係するすべての人や団体が、自分だけでなく身近な人や地域の幸福を考え行動し、荒川区を良くしていこうというものです。この運動を進めていくには、「地域力」が重要であるといえます。

荒川区には、近隣を思いやり助け合う絆が今なお強く残されています。先人から受け継いだ財産であるこの地域力を高めることこそが区民の皆様、そして地域の幸福への原動力であると確信しています。

この地域力につきまして、本年9月、書籍『地域力の時代』を上梓いたしました。この書

籍は、町会長様をはじめ、さまざまな地域活動に取り組む区民の皆様の思いや、研究所の地域力研究会に御参画いただいている先生方から御寄稿を頂戴するなど、これからの目指すべき地域のあり方等を紹介しています。

今後、区民の皆様の幸福実感の向上のため、着実に研究を進めてまいりますので、一層の御理解・御協力をお願い申し上げます。



オランダのテレビ局が取材に訪れました

11月8日、オランダ国営放送のサビーネ氏が、荒川区民総幸福度(GAH)について取材するため、カリフォルニア州立理工大学ポモナ校助教のホール氏とともに荒川区を訪問されました。



荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト 第二次中間報告書の概要

公益財団法人荒川区自治総合研究所は、この度、「荒川区民総幸福度（グロス・アラカワ・ハッピネス：GAH）に関する研究プロジェクト第二次中間報告書」を公表しました。

本号では、この報告書の概要をお届けします。全文は、研究所をはじめ、図書館など区の施設でご覧いただけるほか、研究所ホームページ（<http://www.rilac.or.jp/>）に掲載しています。また、有償頒布も行っています。詳細は、本号 18 ページをごらんください。

I 荒川区民総幸福度（GAH）の取組み

荒川区は、平成 19 年に定めた「荒川区基本構想」の中で、区が目指すべき将来像を「幸福実感都市あらかわ」と定め、区民の幸福実感、すなわち荒川区民総幸福度（Gross Arakawa Happiness : GAH）のさらなる向上に向けさまざまな取組みを行っている。

荒川区民総幸福度（GAH）の取組みには、「指標化」と「運動」の 2 つの側面がある。「指標化」は、区民の幸福度を測定する指標を作成し、そこから区民の幸福実感上の課題や地域における課題を把握することによって、幸福度向上のための最適な政策・施策・事務事業を実施していくものである。

「運動」の側面は、区に関係するすべての人や団体が、自分自身や身近な人、さらには地域の幸福を考えることを通じて、共に荒川区をより良くしていく運動につなげていこうというものである。幸福とは一人ひとりの主観的な実感ではあるが、必ずしも一個人の問題に留まるものではない。幸福には行政だけでは力の及ばない領域があり、そうした領域については、地域に関係するあらゆる人や団

体による、地域ぐるみの運動を起こしていくことにより、幸福度を向上させることができると考えられる。

第二次中間報告書では、「荒川区基本構想」に定める 6 つの都市像すべてについての指標案と質問文案を示すとともに、関連指標を例示した。既に中間報告書で示した「健康」「子育て・保育」の 2 指標案についても修正を加えている。また、行政の政策・施策への連動や幸福度向上を目指した様々な運動への活用方法の案についても示すことにより、荒川区民総幸福度（GAH）の指標化から活用までの全体像も示した。

荒川区民総幸福度（GAH）指標の全体イメージは、図 1 のとおりである。

荒川区民総幸福度（GAH）指標は「幸福実感指標」と「関連指標」とに分かれる。「幸福実感指標」とは、区民へのアンケート調査等により、区民の主観的な幸福実感を把握する指標である。これは、① 区民が幸福を感じているかを総合的に尋ねる「幸福実感度」と、② 6 つの都市像ごとに設定された指標で構成される。これらは区民の主観的な幸福

度を大きく把握し、主にどのような部分に幸福や不幸の要因があるかを把握するために活用される。「関連指標」とは、幸福実感指標で把握した幸福実感上の課題をさらに詳細に把握するために活用されるものである。例え

ば、居住している地域で犯罪について不安を感じるかどうかを把握する「犯罪への不安」という幸福実感指標の関連指標としては、「犯罪認知件数」や、「防犯カメラ設置数」などが考えられる。

図1 荒川区民総幸福度 (GAH) 指標の全体イメージ



II 荒川区民総幸福度 (GAH) 指標案

ここでは、各指標案の最上位に位置する指標として区民の幸福実感を総合的に尋ねる「幸福実感度」と、6つの都市像ごとに、幸福実感指標及びその質問文の案並びに関連指標（例示）を示す。なお、表に挙げた関連指標は、あくまで複数ある関連指標の中から代

表的な指標を例として挙げたものである。関連指標のうち、主観指標（区民の主観的な実感に関する指標）には●印を、客観指標（統計データ等に基づき客観的に把握される指標）には○印をつけた。

表1 「幸福実感度」指標案

幸福実感指標案	
指標案	質問文案
幸福実感度	あなたは幸せだと感じますか？

表 2 健康・福祉指標案

幸福実感指標案			関連指標（例示）	
指標案		質問文案		
健康・福祉	健康実感度		あなたは、健康であると感じますか？	
	体の健康	運動の実施度	あなたは、体を動かしたり運動したりすることができていると思いますか？ ※スポーツ、ランニング、散歩や階段の利用などを含む。	<ul style="list-style-type: none"> ○健康寿命 ○早世率 ○要介護出現率 ○転倒率 ○BMI25以上の率 ○メタボリックシンドロームの該当者予備群減少率 ○運動習慣のある人の割合 ●食生活に満足している人の割合 ○野菜を毎日摂る人の割合
		健康的な食生活の実感度	あなたは、健康的な食生活を送ることができていると思いますか？	
		体の休息度	あなたは、体を休めることができていると思いますか？	
	心の健康	つながりの実感度	あなたは、家族や友人など人とのつながりがあると感じますか？ ※ここでのつながりとは、話をしたりあいさつをしたりといった関係を含む。	<ul style="list-style-type: none"> ○健康寿命 ○自殺死亡率 ○うつ傾向率 ●地域に頼れる人がいる実感（注:文化に関する幸福実感指標案）
		自分の役割・居場所がある実感度	あなたは、家庭や職場、学校、地域などで、自分の役割があったり、自分の居場所があったりすると感じますか？	
		心の安らぎの実感度	あなたは、心が安らぐ時間を持つことができていると感じますか？	
	健康のための環境	医療の充実度	お住まいの地域では、病気やけがをした時の医療が充実していると感じますか？ ※医療の充実とは、病院や薬局などの施設の充実や、医療の質の充実などを指す。	<ul style="list-style-type: none"> ○1万人当たり医療施設数 ○1万人当たり薬局数
		福祉の充実度	お住まいの地域では、高齢者や障がい者への福祉が充実していると感じますか？ ※福祉の充実とは、高齢者の介護施設や障がい者の生活支援施設といった施設の充実や、福祉サービスの質の充実などを指す。	<ul style="list-style-type: none"> ○特別養護老人ホーム待機者数 ●障がい者福祉サービスへの満足度

表 3 子育て・教育指標案

幸福実感指標案		質問文案	関連指標（例示）	
指標案				
子育て・教育	子どもの成長の実感度	あなたは、自分のお子さんが健やかに成長していると感じますか？		
	望む子育てができている実感度	あなたは、自分が望む子育てをすることができていると感じますか？		
	家族関係	親子コミュニケーションの充実度	あなたの家庭では、親子間でコミュニケーションがとれていると感じますか？	○親子の会話時間
		家族の理解・協力度	あなたの家族には、子育てに関する理解や協力があると感じますか？ ※ここでの家族とは、配偶者、自身及び配偶者の親、親類などを含み、同居しているかを問わない。	●家族内での育児分担度
	「生きる力」	規則正しい生活習慣の習得度	あなたは、自分のお子さんが規則正しい生活習慣を身につけていると感じますか？	●子どもへのしつけの実施度 ●食を通じた「生きる力」の習得度
		「生きる力」の習得度	あなたは、自分のお子さんが、社会で生活していく上で必要な知識や技能、社会性、体力など（「生きる力」）を身につけていると感じますか？ ※「生きる力」とは、知力面、道徳面、身体面に関して、社会で生活していく上で必要な知識やそれを活用する技術を身につけていることを指す。	○学力調査結果 ○児童、生徒一人当たり読書冊数 ●子どもに社会性・思いやりがあると感じる親の割合 ○体力測定総合評価 ○外国語の習得度
		子育て・教育環境の満足度	お住まいの地域における子育て・教育関連事業・サービス・施設など（民・官が提供するものを問わず）に満足していますか？	●学校教育の満足度 ○いじめ認知件数 ●経済支援の子育て・教育への貢献度 ○待機児童数 ●在宅支援事業の子育て貢献度 ○オムツ替え・授乳できる場所の数 ●遊び場や体験できる場・機会の充実度 ○子ども施設の整備率 ○子育て応援サイトアクセス件数
	地域の子育てへの理解・協力度	お住まいの地域では、子育て家庭に対して理解し、協力しようとする雰囲気があると感じますか？	●子育てについて相談・頼れる人がいる実感度	

表 4 産業指標案

幸福実感指標案			関連指標（例示）	
指標案	質問文案			
産業	生活のゆとり			
	仕事	生活の安定	あなたは、生活を送るのに必要な収入を安定的に得ていくことに不安を感じますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●望まない非正規雇用の割合 ○失業率 ○再就職までの期間 ●生活の余裕を感じる人の割合
		ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）	あなたは、仕事と私生活とのバランスが取れていると感じますか？	<ul style="list-style-type: none"> ○労働時間 ●自由に過ごすことができる時間の有無
		仕事のやりがい	あなたは、仕事にやりがいや充実感を感じていますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●自分が活躍する場があると感じる人の割合
	地域経済	まちの産業	荒川区の企業（お店や町工場など）は、元気で活力があると感じますか？	<ul style="list-style-type: none"> ○区内事業者の売上 ○区内事業所数・従業員数 ○新製品・新技術の開発件数
		買い物利便性	荒川区内は、買い物が便利だと思いますか？	<ul style="list-style-type: none"> ○営業時間 ●品揃えに対する不満度
		まちの魅力	荒川区は、区外から人が訪れたいくなる魅力あるまちだと思いますか？	<ul style="list-style-type: none"> ○あらかわ遊園入場者数 ○バラの市来場者数 ○区施設・イベント来客者数

表 5 環境指標案

幸福実感指標案		質問文案	関連指標（例示）	
指標案				
環境	生活環境の充実度	お住まいの地域は暮らしやすい生活環境であると感じますか？		
	利便性・ユニバーサルデザイン	施設のバリアフリー	お住まいの地域の商業施設や公共施設は、バリアフリー化など利用者に配慮されていると思いますか？ ※施設のバリアフリーとは、身体障がい者や高齢者が生活を営む上で支障がないように、建物が配慮されていることを指す。	○バリアフリー進捗率 ○商業施設・公共施設のバリアフリー整備状況
		心のバリアフリー	お住まいの地域では、困っている人を見かけた時に、声を掛けたり協力したりしやすい雰囲気があると感じますか？	○おせっかいおじさんおばさん運動を知っている人の割合
		交通利便性	お住まいの地域では、交通の便がよいと感じますか？ ※ここでの交通とは、交通機関、自転車、自動車や徒歩での移動などを含む。	○駐輪可能台数 ○最寄り交通機関へのアクセス時間 ●自動車の走行や駐車しやすいと感じる率 ●公共交通が整備されていて区内や他地区への交通の便がよいと感じる率 ●人が歩く空間が整備されていて歩いて楽しく快適であると感じる率
	快適性	まちなみの良さ	お住まいの地域のまちなみ（景観・緑など）は良いと感じますか？	●まちなみに統一感があると実感する率 ●景観が良好であると感じる区民の割合 ○違反広告物除却件数 ○緑被率
		周辺環境の快適さ	お住まいの地域では、生活する上で不快さを感じますか？ ※ここでの不快さとは、放置自転車、ポイ捨てなどを含む。	○駅周辺の歩きたばこ者の数 ○放置自転車撤去数
	持続可能性	持続可能性	あなたは、節電やごみの減量など、地球環境に配慮した生活をしていると思いますか？	○資源の回収量 ○ごみの排出量 ○リサイクル率 ○エコライフチャレンジファミリー参加世帯数

表 6 文化指標案

幸福実感指標案		質問文案	関連指標（例示）	
指標案				
文化	余暇の過ごし方や文化とのふれあいによる精神的豊かさ・心のゆとりの実感度			
	余暇活動	余暇の満足度	あなたは、自分の余暇の過ごし方に満足していますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●余暇・文化活動を行うことができる機会 ●自由に過ごすことができる時間の有無 ○文化施設数 ○文化・娯楽関連イベント数
		生涯学習環境の充実度	お住まいの地域では、生涯にわたって学習できる環境が充実していますか？	<ul style="list-style-type: none"> ○図書館利用者数 ○スポーツひろばの参加者数 ○生涯学習講座開催回数
	地域文化	地域への愛着度	荒川区の文化や特色に愛着や誇りを感じますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●地域行事への参加による充実度 ●荒川の文化に関心がある区民の割合 ●区に魅力があると感じる区民の割合 ●荒川区の地域ブランドへの関心度
		地域の人との交流の充実度	お住まいの地域の方と交流することで充実感が得られていますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●地域行事への参加による充実度 ●地域に人と交流できる機会の充実度 ●地域の憩える場の充実度
		地域に頼れる人がいる実感度	お住まいの地域に頼れる人がいると感じますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●子育てについて相談・頼れる人がいる実感度 ●災害時に近隣の人と助け合う関係があると感じる人の割合
		文化的寛容性	お住まいの地域では、文化や言語が異なる人々への思いやりや寛容さがあると感じますか？	<ul style="list-style-type: none"> ●多文化共生への関心度

表 7 安全・安心指標案

幸福実感指標案			関連指標（例示）	
指標案	質問文案			
安全・安心	安全・安心実感度			
	犯罪	犯罪への不安	お住まいの地域では、犯罪について不安を感じますか？ ※ここでの安全とは、防犯性・防災性などをすべて含む。	
	事故	交通安全性	お住まいの地域では、自動車や自転車などの交通事故の危険を感じますか？	○犯罪認知件数 ○自転車盗難件数 ●不安を感じる暗がりがあると感じる人の割合 ○街路灯の数 ○防犯カメラ設置数 ○地域の見守り（防犯パトロール）実施回数
		生活安全性	家庭や学校・職場などで、交通事故以外の生活上の事故の危険を感じますか？ ※ここでの生活上の事故とは、手すりがないことによる転倒、柵がないことによる転落、乳幼児の事故などを含む。	○交通事故死傷者数 ○自転車交通事故件数 ○交通安全運動参加者数 ●交通マナーが浸透していると感じる人の割合 ○自転車運転免許保有者数
	災害	個人の備え	災害（地震・火災・風水害）に対する備えを十分にしている安心感がありますか？	○住宅の耐震化率 ○家具の転倒防止をしている人の率 ○備蓄をしている（3日分）人の率 ○訓練参加者数 ○一時避難場所を認知している人の率
		災害時の絆・助け合い	災害時に近隣の人と助け合う関係があると感じますか？	○町会防災訓練実施率 ○消防団の団員数 ●災害時に頼れる人がいる人の率 ●声掛けできる隣人がいる人の率
		防災性	お住まいの地域は災害に強いと感じますか？	○不燃領域率 ○地域危険度（ランク） ○老朽住宅率 ○備蓄食糧の充足率 ○避難所の数

III 海外自治体等における幸福度指標事例

荒川区民総幸福度（GAH）の指標を作成していく上での参考とするため、海外自治体等における幸福度指標の先行事例について分析した。

IV 既存の荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民調査の分析結果及び今後の実施方針

ここでは、荒川区政世論調査等における荒川区民総幸福度（GAH）に関する調査の分析結果を示すとともに、すでに実施されている区民向け調査の課題を踏まえた上で、今後予定している荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査の実施方針を示した。

荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査においては、無作為抽出によって標本抽出を行うアンケート調査を基本として行い、同一人物への継続調査や社会的弱者等の具体的なニーズのある人々に集中的に調査する方法を部分的に活用することが考えられる。また、アンケートへの自由記述欄の設定、対面調査など様々な方法を相互補完的に実施し、区民の幸福実感を把握することが望ましいと考える。

V 荒川区民総幸福度（GAH）指標の活用方法案

ここでは、荒川区民総幸福度（GAH）指標をいかに政策・施策・事務事業の改善や立案、荒川区民総幸福度（GAH）の運動の上で活用するかについて、試験的に検討を行った内容を示した。

1 荒川区民総幸福度（GAH）指標の課題把握・共有、意思決定支援ツールとしての活用

荒川区民総幸福度（GAH）指標の重要な役割は、次のとおりである。

まず、幸福実感指標や関連指標の分析を行い、その結果から区民の幸福実感上の課題や地域の課題を把握し、区に関係するあらゆる人や団体で共有する「課題把握・共有ツール」としての役割である。次に、その共有された課題を解決するためにどのような政策・施策・事務事業や運動を行うかについての適切な意思決定を支援する情報を提供する「意思決定支援ツール」としての役割である。

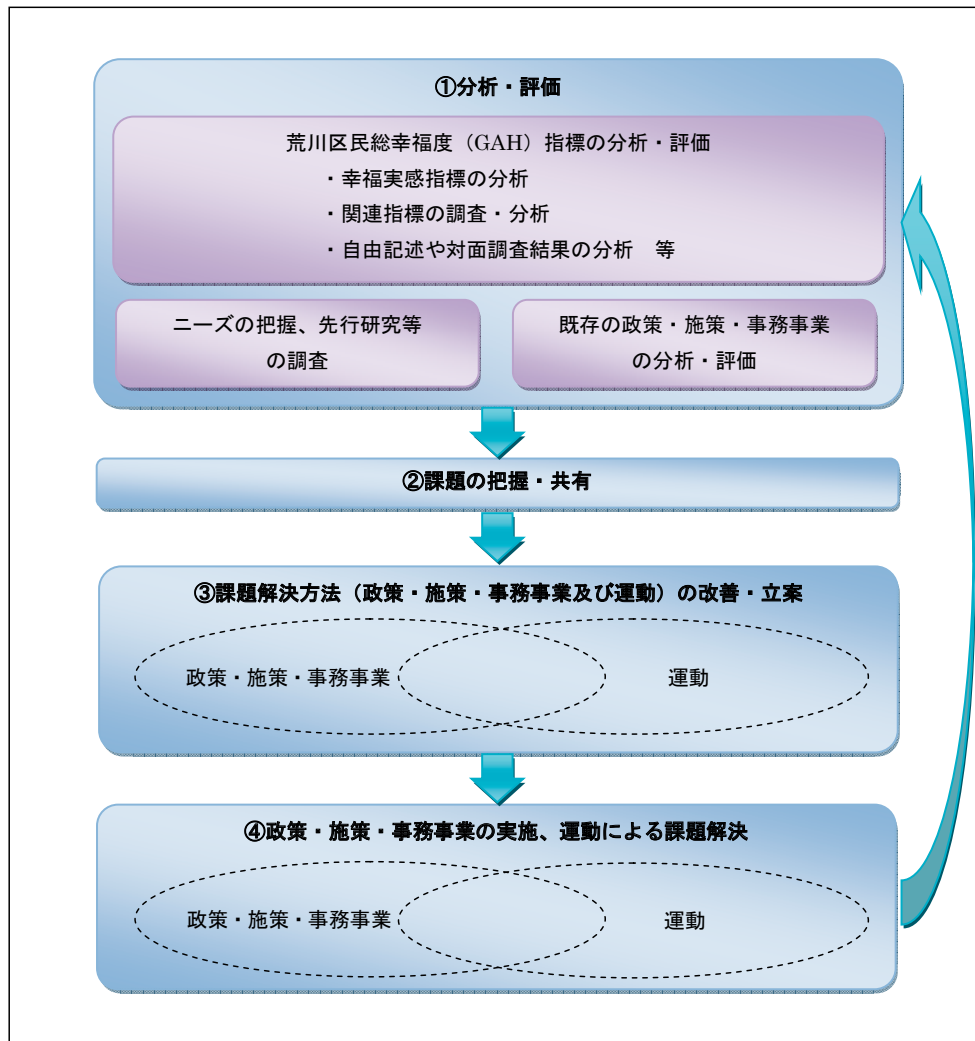
2 荒川区民総幸福度（GAH）指標の活用プロセスと分析方法案

ここでは、荒川区民総幸福度（GAH）指標を政策・施策・事務事業及び運動に活用していくプロセス及び分析方法について試験的な検討を行った内容を示す。図 2 は、この活用のプロセスのイメージを示したものである。以下、それぞれの内容について示す。

①分析・評価

まず、区民の幸福実感上の課題や地域における課題を把握するために、荒川区民総幸福度（GAH）指標の分析・評価や、地域におけるニーズの把握、先行研究の調査、既存の政策・施策・事務事業の分析・評価などを行う。以下、(i) から (v) まで、分析・評価方法として現時点で考えられるものの例をいくつか示す。

図 2 荒川区民総幸福度 (GAH) 指標の政策・施策・事務事業及び運動への活用プロセスイメージ



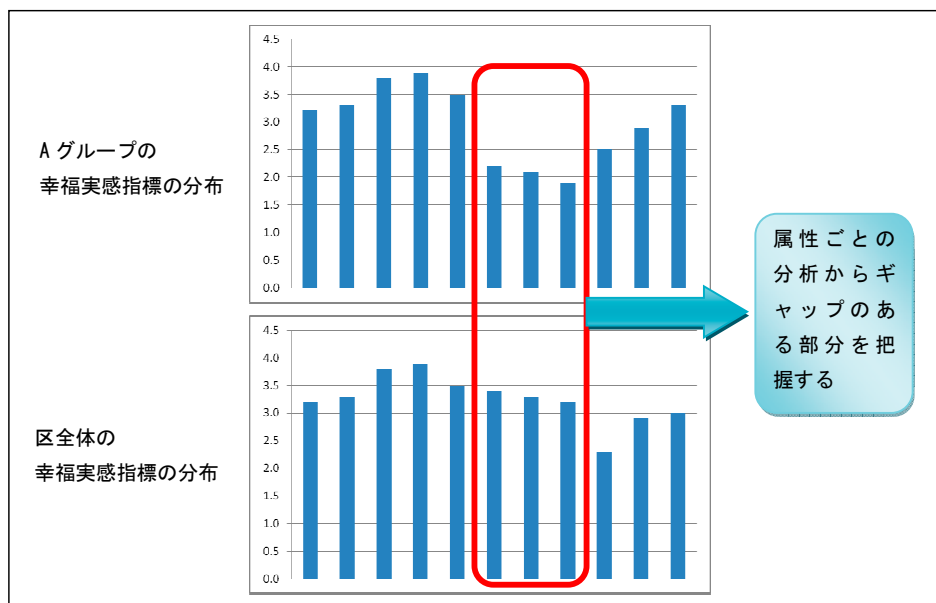
(i) 幸福実感指標の調査・分析

区民アンケート調査によって幸福実感指標の数値が明らかになった後、その数値の分析・評価を行うことにより、そこから区民の幸福実感上の課題や地域における課題を把握する。ここでは、主な分析方法の例を示す。

第 1 に、幸福実感指標 46 項目の間の相関を分析する方法である。相関を分析することにより、どのような指標が幸福実感に影響を与えているかを把握することで、政策・施策・事務事業を改善・立案する際に参考情報とすることができると考えられる。

第 2 に、幸福実感指標を属性（居住地、年齢等）ごとに分析することで、課題のある対象や領域を把握する方法である。この分析方法のイメージを示したものが図 3 である。同じ属性を持つ人のグループごとに幸福実感指標の分布状況を把握し、区全体の幸福実感指標の分布状況と比較する方法が考えられる。これにより、幸福実感が低い、課題を持つ人がどのような属性に偏っているのかを把握することができると考えられる。

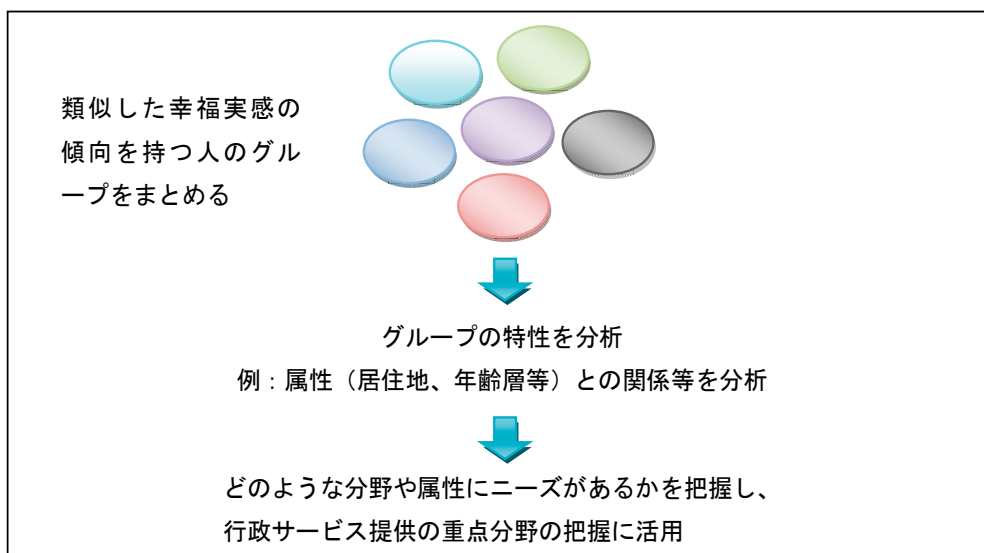
図3 幸福実感指標を属性ごとに分析する方法のイメージ



第3に、図4に示したように、幸福実感指標の数値から類似した幸福実感の傾向を持つ区民をグループ化し、そのグループの特性（属性等）を分析することにより、どのような分野や属性にニーズがあるのかを把握し、重点的に行政サービスを提供する分野の把握

に活用する方法も考えられる。例えば、「安全・安心実感度」が低いグループをまとめてその属性を分析し、〇〇地区に「安全・安心実感度」が低い人が偏っていることが分かった場合には、〇〇地区への重点的な対応を検討していくといったことが考えられる。

図4 同じ傾向を持つ人をグループ化してその特性を分析する方法のイメージ



その他、複数の幸福実感指標を組み合わせ、類似した傾向を持つ人を抽出し、個人単位で配置して全体を俯瞰する方法や、同じ属性を持つグループの幸福実感指標に関するレーダーチャートを作成し、経年でどのように変化していくかを見る方法等も考えられる。

(ii) 関連指標の調査・分析

(i) で把握した課題のある対象や領域について、関連指標を活用して詳細に調査することにより、どのような部分に課題があるのかをさらに詳細に把握する。

(iii) 自由記述や対面調査結果の分析

区民アンケート調査に自由記述欄を設け、択一の回答だけでは表れない区民の幸福実感や地域課題などを把握することを考えている。また、区民に対面調査を実施し、区民の幸福実感や地域課題などをきめ細やかに把握することも有効と考えられる。

(iv) ニーズの把握、先行研究等の調査

既存の調査結果や、必要に応じて実施するアンケート調査、ヒアリング調査の結果などから、どのような部分にニーズがあるのかを把握する。また、課題に関連する先行研究等を調査し、課題についての分析を深める。

(v) 既存の政策・施策・事務事業の分析・評価

明らかとなった課題に対して、区が実施している既存の政策・施策・事務事業がどのような寄与をしているか、不足している部分がないかを把握する。

なお、(i) から (v) で示した分析・評価方法は、同時に行われる場合も、一部の分析・評価方法だけが行われる場合もある。必要に応じて適切な分析・評価方法を採用し、結果を総合的に勘案して課題を把握することが望

ましい。

②課題の把握・共有

①の分析・評価から得られた結果については、行政内での活用に留めるのではなく、レポート等にまとめた上で、区に関係する人や団体などに広く公開することで、課題の共有を図る。

③課題解決方法（政策・施策・事務事業及び運動）の改善・立案

以上の分析結果に基づき、把握・共有した課題に対する解決方法を検討する。ここで言う課題解決方法には、区民をはじめとする区に関係するあらゆる人や団体が中心となって検討・実施する荒川区民総幸福度（GAH）の運動や、行政が改善・立案する政策・施策・事務事業もある。もちろん、両者は互いに協力し合い、連携し合いながら一緒に行われたりすることも、別々に行われたりすることもありうる。

④政策・施策・事務事業の実施及び運動による課題解決

改善又は立案した政策・施策・事務事業及び運動を実施する。実施した後は、再び①のプロセスに戻り、その成果について分析・評価する。

以上のような①～④のプロセスを循環させていくことで、区民の不幸・不安の要因や地域の課題を解決し、区民の幸福実感の向上に寄与し、あたたかい地域社会を築いていくことが可能になると考えられる。

3 荒川区民総幸福度（GAH）指標の活用イメージ

ここでは、荒川区民総幸福度（GAH）指標を政策・施策・事務事業及び運動へどのように活用していくか、そのイメージを示したい。

(1) 政策・施策・事務事業及び運動への活用シミュレーション

ここでは、平成18年度から実際に荒川区で実施している「あらかわ満点メニュー」の事例を参考として、図2で示した荒川区民総幸福度（GAH）指標の政策・施策・事務事業及び運動への活用プロセスに沿って、指標をいかに分析・評価し、活用していくかについてシミュレーションを行った例を示した。

(2) 政策・施策・事務事業の実施と幸福度の向上の関係性整理（イメージ）

区民の幸福度の向上を目指した政策・施策・事務事業の改善・立案をしていくためには、政策・施策・事務事業の実施と幸福度向上との関係性を整理することが必要となる。

そこで、政策・施策・事務事業の実施が関連指標の向上に寄与し、さらに幸福実感指標の向上に寄与していくといった流れのイメージ化を試みた。イメージ化に当たっては、次のような考え方のもと行った。

- ・都市像ごとに、比較的關係性の整理がしやすいと思われる幸福実感指標を1つ取り上げ、その関連指標及びそれらの指標の向上に寄与すると思われる政策・施策・事務事業を整理して図に示すとともに、その説明文を記した。
- ・図は、各指標や政策・施策・事務事業の間の因果関係を示したものではなく、政策・施策・事務事業の実施により期待される成果の流れをイメージ化したものである。
- ・区民や企業等の地域の主体が行う活動についても一定程度考慮しつつ、行政が実施する政策・施策・事務事業を中心に検討を行った。
- ・ここでは、わかりやすくイメージ化するため、政策・施策・事務事業の最小単位であ

る事務事業を中心に検討を行った。

本書では、6つの都市像ごとにその関係性を整理し、イメージ化した図及びその説明文を掲載しているが、ここでは、そのうちの環境分野について示す。

(i) 検討の概要

図5のとおり、環境指標案の中から「まちなみの良さ」という幸福実感指標を取り上げ整理した。

(ii) 考察

ここでは、「まちなみの良さ」に大きく影響すると考えられる「景観」及び「緑」の2つの観点から検討を行った。

(a) 景観

「まちなみの良さ」に影響すると考えられるのが景観の良さである。ただ、どのような景観が良いと感じるかは、基本的には個人の主観的なものであることから、景観の良さを測るためには、まず個人の主観を聞く必要があると考えられる。そこで、景観の良さを測定する主観的な指標としては、「景観が良好であると感じる区民の割合（%）」などが考えられる。

また、客観的に景観が良いかを把握するには、景観を規制・誘導する条例や規則が整備されており、それが遵守されているかどうか1つの基準になると考えられる。区民や建築業者などが家屋やビルなどを建築する際に、それがまちなみと調和したものとなるようにするためには、一定の基準に基づいて誘導・規制していくことが重要である。基準が遵守されれば、区民の目に映る景観が少しずつでも良くなっていくと考えられることから、客観的な指標としては、「景観規定非適合案件是正率（%）」や「建築物等の景観形成基準適合率（%）」などが考えられる。

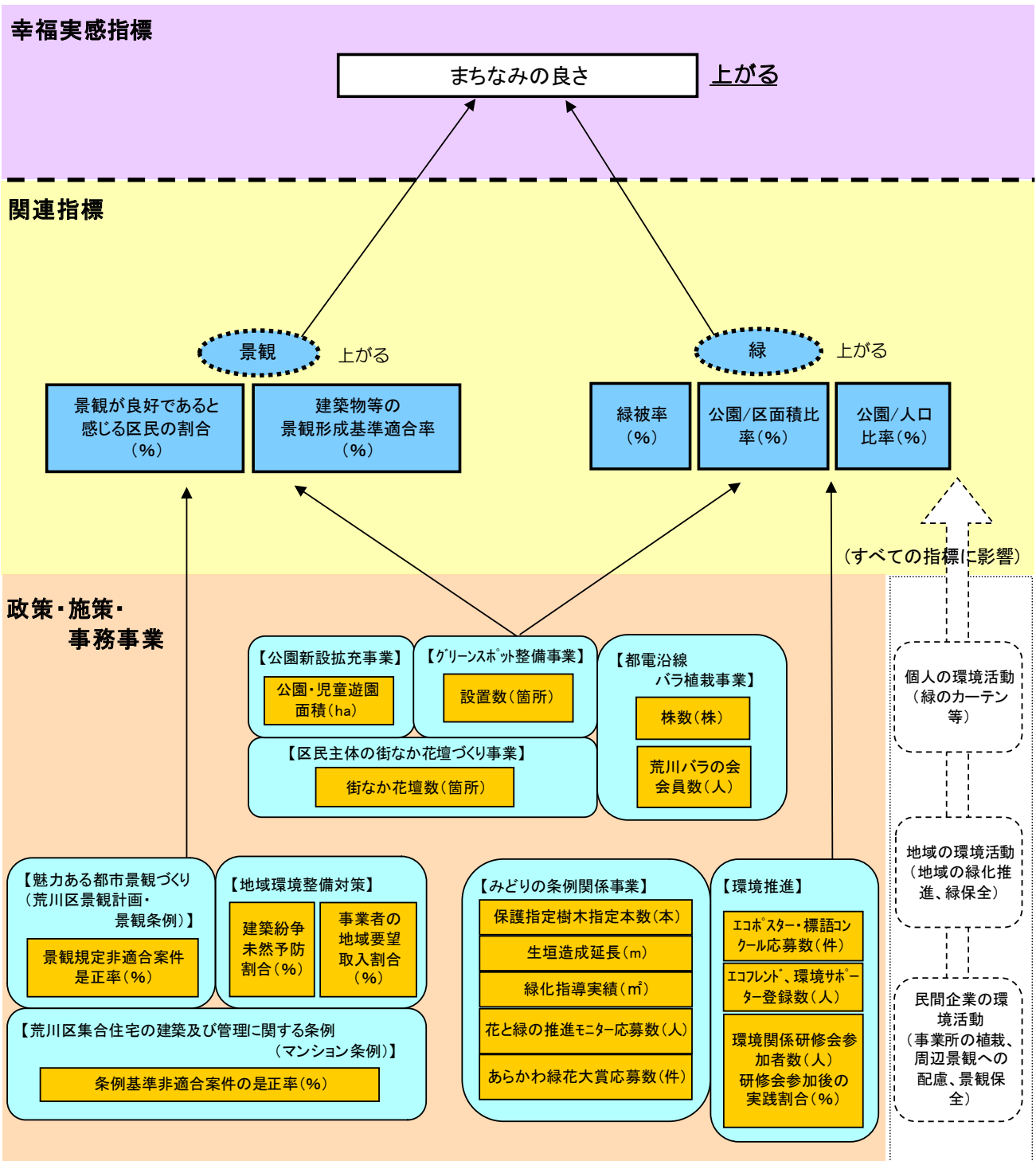
(b) 緑

地域に緑があることは、「まちなみの良さ」につながると考えられる。荒川区のような都心エリアで緑を増やすためには、公有地の緑を増やすことや、区民の活動・協力により緑を増やすことが必要となる。

緑に関連する指標としては、「緑被率 (%)」

「公園/区面積比率 (%)」などが考えられる。これらの指標の向上を図るためには、公園の拡充や「グリーンスポット整備事業」等の推進、また「区民主体の街なか花壇づくり事業」などの区民参加の活動により緑を増やしていくことが重要である。

図5 環境分野における政策・施策・事務事業の実施と幸福度の向上の関係性(イメージ)



以上、政策・施策・事務事業の実施が関連指標、幸福実感指標へとつながっていく流れのイメージを示してきた。これらの検討によって得られた示唆及び今後の課題は次のとおりである。

- ・今回示したのは、政策・施策・事務事業の実施が関連指標の向上に寄与し、さらに幸福実感指標の向上に寄与していくといった流れの1つのイメージである。今後、各指標及び政策・施策・事務事業間の関係性についてさらに深く検討をしていく必要がある。
- ・幸福実感指標や関連指標の向上は、様々な政策・施策・事務事業を複合的に実施することで初めて可能になると考えられるため、政策・施策・事務事業の検討・実施に当たっては、組織横断的に進めていくことが重要である。
- ・幸福度の向上のためには、個人の取り組みや地域における様々な主体の協力・連携が重要であることから、荒川区民総幸福度（GAH）の運動が果たす役割は非常に大きいと考えられる。そのため、今後、運動と政策・施策・事務事業との連携を深めていく必要がある。

以上、荒川区民総幸福度（GAH）指標の政策・施策・事務事業及び運動への活用方法について示してきたが、これはあくまで現時点での試験的な検討内容であり、今後、荒川区民総幸福度（GAH）に関する区民アンケート調査を実施し、その分析・評価を行う中で実際にどのような活用ができるか検証していく必要がある。

VI 荒川区民総幸福度（GAH）の向上を目指した運動

ここでは、荒川区民総幸福度（GAH）の指標化と並ぶ一側面である運動について述べるとともに、荒川区民総幸福度（GAH）の向上に寄与していると考えられる活動事例を紹介する。

①町会・自治会や民生委員・児童委員の活動事例

町会・自治会、民生委員・児童委員、保護司、少年団体、体育協会、青少年育成委員、消防団、NPO、企業など、地域における人や団体により地域の活動が数多く行われている。例えば、高齢者の見守り、子育て、防災等の面で区民や団体が中心となり区と協働した取り組みが行われている。

②区内飲食店による健康づくりの活動事例

区内の飲食店で健康に配慮した食事が出来るように「あらかわ満点メニュー」が提供されている。区内飲食店、女子栄養大学、区が連携し、美味しくヘルシーなメニューを開発することで、地域全体で健康づくりをするという取り組みである。

③転倒予防体操における高齢者ボランティアの活動事例

「荒川ころばん体操」は、高齢者の転倒予防を目的とし、身体の筋力アップやバランス感覚の向上、歩行能力の改善を図るため、区民、首都大学東京健康福祉学部及び区によって共同開発された区のオリジナルの転倒予防体操である。この体操の普及に当たっては、ボランティアである「荒川ころばん体操リーダー」が中心となって運営を行っている。

④子どもの見守りにおける高齢者ボランティアの活動事例

子どもの安全・安心のための取り組みの1つとして、荒川区シルバー人材センターで

は、小学校や学童クラブの児童の下校の際の付き添いや見守り、保育園の周辺や出入口の見守りを行っている。また、町会・自治会やNPO法人、母の会、青少年育成地区委員会、学校関係者のボランティアなども地域の見守り等の自主的な活動に取り組んでいる。

⑤大学、地域、行政による育児における孤立解消に向けた活動事例

「みんなの実家@まちや」は、地域のボランティアサークル「35（産後）サポネット in 荒川」が中心となって、民家を借りて運営され、育児で困った時に様々な人が助けられる子育て支援の拠点となっている。

⑥区民による育児における孤立解消に向けた活動事例

子育て世代の方から「子どもを連れて和む場所がない」という声を受け、主任児童委員（当時）が主体となって、集合住宅の管理組合や社会福祉協議会、区からの支援を受け、「子育て喫茶汐たま」という取組みを始めた。

⑦新たな観光スポットづくりに向けた活動事例

区のシンボルである都電荒川線の沿線には、ボランティアグループ「荒川バラの会」が管理している140種13,000株のバラが植栽されている。花の時期には、色とりどりのバラが咲き誇り、バラを見ようと区外からも多くの人が訪れる。

⑧区民による災害時における救出・救護の活動事例

荒川区の町会・自治会には、区民の自主防災組織である「防災区民組織」が結成されている。防災区民組織の中には、災害時に、「おんぶ」をして救出するという「おんぶ作戦」と呼ばれる避難援助体制が整備されている組織もある。地域ごとに避難援助体制を整備し、非常時に備えている。

⑨地域活動の担い手となる人材育成に向けて

人とのつながりを大切にしたいあたたかい地域社会の基盤をつくるためには、地域活動の担い手となる人材の育成が必要である。そこで、荒川区は平成22年度に、地域活動を行うために必要な知識や技術を身につける育成の場として荒川コミュニティカレッジを開校した。ここで学んだ区民が、様々な職歴、経歴を生かした運動が起きることが期待されている。

このように、荒川区には様々な活動が根付いており、今後もこのような活動が増えていくことで、あたたかい地域社会が実現していくものと考えられる。

VII 今後の検討課題及び検討の進め方

最後に、今後の取り組みに当たっての課題及び検討の進め方を示す。

1 指標に関する課題と検討の進め方

(1) 区民アンケート調査の検討及び実施

今後は、荒川区民総幸福度（GAH）に関する本格的な区民アンケート調査の実施に向け、調査対象、標本抽出方法、質問方法などについて具体的な設計を進めていく必要がある。また、現在の調査では対象外となっている20歳未満の区民への調査方法などについても検討していく。

(2) 荒川区民総幸福度（GAH）指標の検証

今後は、今回示した指標案が区民の幸福実感を適切に把握できる指標となっているかどうか、検証が必要となる。検証した結果として、課題があることがわかった場合には、指標の修正を行い、以降のアンケート調査に反映させていくことが必要である。また、時代や社会変動とともに、区民の幸福感も変わっていく可能性がある。こうした点からも、指

標の検証と修正を適宜行っていく必要がある。

(3) 指標の総合化の検討

今後、指標案を、個別の指標のまま提示するのか、指標を総合化して数値を算出するのかについて検討していく必要がある。

2 指標の政策・施策・事務事業及び運動への活用

(1) 政策・施策・事務事業への活用方法の具体的な検討

アンケート調査の結果を実際に分析し、政策・施策・事務事業及び運動への活用の可能性について詳細な検証を行う必要がある。その検証結果に基づき、指標の分析方法の改良を行い、必要に応じて今回示したものの以外の分析方法についても検討していく必要がある。

(2) 荒川区民総幸福度（GAH）の運動の実施

荒川区民総幸福度（GAH）の運動の側面について重要なこととして、第1に、荒川区職員の意識改革がある。区民の幸福度の向

上のためには、まず職員が、これまで以上に区民を幸せにするシステムの担い手であるという自覚と自負を持つことが重要である。

第2に、荒川区民総幸福度（GAH）をきっかけに、区民が自分や身近な人、地域の幸福について考えることがある。周りの人々を思いやり、助け合う気持ちの中で区民が行動していくことが、自分自身の幸福感を高めていくことにも寄与し、分かち合いや思いやりにあふれた、あたたかい地域社会の実現につながると考えている。

区民の幸福度を尺度として行政サービスを行い、区民の不幸を少しでも減らし、区民が幸福を実感できる地域社会を築いていくことは、真の意味での住民本位の行政を実現することにつながっていくと考えられる。荒川区民総幸福度（GAH）の取組みを通じて、今後も荒川区の誇りである地域力をさらに高めながら、荒川区に住むすべての人が幸福を実感できるあたたかい地域社会を築いていきたい。

当研究所が発行している報告書の有償頒布・閲覧について

- 研究所で有償頒布を行っています。
 - ・「荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト第二次中間報告書」（平成24年8月）
価格 1冊 380円（税込み）
 - ・「荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究プロジェクト中間報告書」（平成23年8月）
価格 1冊 250円（税込み）
 - ・「子どもの貧困・社会排除問題研究プロジェクト最終報告書」（平成23年8月）
価格 1冊 250円（税込み）
- 以下の場所で、報告書を閲覧できます。
 - ・区立図書館
 - ・区民事務所
 - ・荒川区役所情報提供コーナー（荒川区役所本庁舎2階）
 - ・公益財団法人荒川区自治総合研究所（荒川区役所北庁舎3階）

※ 各報告書は、研究所ホームページ（<http://www.rilac.or.jp/>）でも公開しています。

講演「近未来の社会・街を考える」

荒川区自治総合研究所では、人材育成や情報発信等の一環として、各方面で講演等を行っております。

平成24年1月26日、東京大学教授の坂田一郎先生をお招きし、荒川区職員ビジネスカレッジと研究所の連携講座を開催しました。今号では、その内容を要約してお送りします。

講師 坂田一郎氏（東京大学教授・工学博士）

1989年東京大学経済学部卒業後、通商産業省（現 経済産業省）に入省
2008年から、東京大学政策ビジョン研究センター兼工学系研究科教授
荒川区民総幸福度（GAH）に関する研究会客員研究員、荒川区顧問

講演テーマについて

今日の話が、皆さんに、少し長い視野、高い目線で、いろいろ考えていただくきっかけになればと思います。

例えば、「公園緑地」には、子どもの遊び場、防災、緑の景観、高齢者の方の憩いの場、高齢者の方と子どもが触れ合う場等という意味もあります。一口に公園緑地の管理をしているといっても、その仕事は、多様な目的や区民の生活、多数の部局にかかわってくるものです。

このような施策を進める場合、「高度を上げて俯瞰的に物事を見る」ということが必要になってきます。「俯瞰」というのは、広く見渡すという意味です。高度を上げて俯瞰することについて、ナスカの地上絵の例で説明しましょう。ナスカの地上絵は、地上で見ても、どんな絵かはわかりません。足元の前にある線と、その線から5メートル離れたところにある線とは、関係がないように見えるかもしれません。上空から見下ろすことで、初めて2つの線の間に関連、さらに絵全体における2つの線の位置付けがわかるのです。先の公園緑地の例では、自分の部署の課題（地上の目線）としてだけでなく、それが全区的な多様な課題の解決（上空から見下ろす）に

貢献できるのではないかと考えることで多様な役割があることが見えてくるのです。多様な役割があることを認識することでよりよい公園作りが出来ると思います。私は日頃、こうしたことに役立つ手法を「俯瞰工学」と呼んで研究をしています。多様なニーズや技術・アイデアを踏まえて、未来社会を探索するには、このような目線や手法が欠かせません。



未来社会の決め方

私達は、社会や経済の未来を、どのように見通したらいいのか。1年後ぐらいのことであれば、現在の延長線で考えることができますが、変化が加速している今日、5年後となると、かなり難しくなります。5年を超える未来というのは、実際、「予測」出来るもの

ではないと思います。それでは、未来はどこにあるかという、2つの可能性領域の交点のどこかにあります。1つは技術的、アイデア的に実現可能な社会ということ、もう1つは、国民がどのような将来を選択するか（社会の意図の領域）です。

未来になればなるほど我々は多くのことを選択できます。例えば、1年後ならできないことでも、10年後なら、その間に新しいアイデアが出たり、今あるアイデアが実現可能になったりするので、より多くの選択肢が手に入るというのが、一般的です。

未来像は、新たな技術やアイデアの開拓による可能性を片目でみながら、自分たちがつくりたいと意図する未来社会を国民が考える中で、ある範囲に収れんしていくということです。

さらに、この技術面と社会の選択の面という2つの可能性領域には、相互作用があることも理解しておく必要があります。例えば、前回の大統領選挙においてオバマ大統領は環境問題の解決による社会改革と経済成長を重視すること（グリーングロース、グリーンジョブ）を明確に打ち出しました。それによって、世界中で太陽電池や風力発電、燃料電池、エコカー、スマートグリッドなどに対する研究開発がブームとなりました。オバマ大統領が示した社会の選択、意思に引っ張られ、技術的な可能性領域が広がったのです。逆に、技術の進歩が社会の選択を変えることもあります。例えば、通信技術の発達で自宅で仕事をするテレワークを可能としました。これは、毎日の通勤が難しい子どもを持つ女性や障がい者の方々に、仕事の機会を増やす効果を持ちます。

つまり、基本的には、この2つが互いに関連し合いながら、それらが交わるどこかに未

来社会がみえてくるということです。世界中で進むエネルギー効率化のように、うまく相互に循環するきっかけをつくるのが出来れば、望んだ方向へとどんどん進化させることが出来ます。

ただし、簡単にはそこに着地できません。3番目の重要な要素として財政があります。技術的可能で社会が望むことであっても、資金的な制約で出来ないことが多くあります。典型例は、社会保障です。医療の世界では、先進技術が次々と生まれていますが、先進医療にはお金がかかる場合が多いのです。皆さんの仕事の中でも、この3つの要素の掛け合わせを考えながら、どんな社会を目指すべきか、ということを考えていって欲しいと思います。そうした俯瞰図の中に、足元の仕事を位置付けることで、よりよい仕事ができると思います。

東京大学前総長の小宮山宏先生は、未来の日本において、「サステナビリティ」（社会の持続可能性）と「高齢者がアクティブに活動できる社会」の2つが同時に実現する社会を作るべきとして「プラチナ社会」を提唱されています。私はこの考えに賛成ですが、東日本大震災を経験したことで、さらにロバストネス（災害に対する頑健性）とレジリアンス（回復力）が3番目の重要な要素として求められるようになったと考えています。

ロバストネスとは、高い堤防、耐震性のある建物、防火壁等によって実現する災害への強さという意味です。レジリアンスとは、何か被害があったときに、早く、効果的に復旧できる準備があることを意味します。例えば、企業が部品・材料の調達先を分散させておくこと、ライフラインに冗長性を持たせておくことは、これに貢献します。

未来社会のおぼろげな姿として、多くの住

民の方々が望まれていることを大まかに言えば、社会が環境に優しく、高齢者が活発に社会活動でき（アクティブエイジング）、自然災害などの非常事態に対して、社会が防備を固めている、あるいは柔軟に対応して機能を取り戻せる、そういう社会ではないかと考えます。我々は、新たに開拓された技術やアイデアといった知を出来るだけ多く、速やかに、きめ細かく取り込みながら、そうした社会をつくっていく必要があります。荒川区では、既に幅広い基本計画群が整備されています。今後、こうした3本の大きな社会ニーズを意識して、複数の計画を関係づけながら、よりよい未来社会づくりに挑んでいく必要があります。この場合、先に述べた2つの可能性領域を捉える必要があるわけですが、技術やアイデア領域については、日頃から社会に広く情報のアンテナを張っておく必要があります。幅広い専門家との交流も重要です。また、社会の意図については、先にお話したように、5年を超える未来社会というのは、一般の生活者にはイメージしにくいところがあります。従って、住民の側からは意図をなかなか具体的に提示することが出来ません。単純なアンケート調査では、捉えられないのです。だから、住民の要望を待つのではなく、区の方から積極的に創造的な提案をしていくことが望まれます。

長期的な目標等にいつから取り組むか

長期的に見たとき、時間の経過と選択肢の実現可能性とは、つながっています。

仮に、5年後までの1つのマイルストーンとして区の中期的な計画があるとするれば、それが10年後の区内の社会にも大きな影響を及ぼすことは明らかです。そのことは、現在、何も手を打たなければ、未来社会の可能性の

一部を削ぐことを意味しています。

従って、「10年後に大きな問題になりそうだから、5年たったら考えよう。」というような姿勢は、誤っているといえます。準備に必要な期間を想定し、それを織り込んで実行計画を立てる必要があります。実際にあった例が、医師の養成の問題です。医師が不足しているから医師の養成数を増やそう、という話になりました。しかし、専門家によると、医師の養成には、大学で6年、専門医の資格を取得するのに、大体5年かかるそうです。つまり、今から医学部の定員を増やしても、今すぐ医学部に入る人は資格取得に11年かかるわけです。これで本当に医者が最も必要なときに間に合うのか。専門家と協力して計算したところ、高齢者人口のピークには間に合わないという結果が出ました。この例は、未来の目標であっても、後送りにしない姿勢が重要であることを示しています。



世の中の変化を感じることの重要性

もう1つ、行政上重要となるのは、変化に対する感度だと思えます。日頃、目の前の仕事に打ち込むほど、変化に対する感度が弱くなる傾向があります。ドッグイヤーとよく言われますが、世の中は非常に速い速度で変化していますので、変化を感じられず対応できないまま10年前に決めたことを目指して一

生懸命やっても、社会の選択や技術レベルの変化を見逃すこととなり、結果的に十分評価されない。このようなことも今の時代であれば十分ありそうな話です。

区民の考えや選択が変化すれば、荒川区自治総合研究所で作成している「幸福度指標」の内容も変える必要があると思います。

未来社会の構想のポイントについてまとめますと、社会の「こうしたい」という思いだけではなく、物理的・技術的なことも考慮して将来を考えないといけないし、両者の間に関係性がある。また、お金もないとできない。将来の世界を構想するには、その3つを掛け合わせて考えなければいけないということ、従来に比べて変化が非常に激しくなっている、変化を常に感じる姿勢が必要である、ということです。

部署を超えた観点でアクティブエイジングを考える

最後に、アクティブエイジングについて付言しておきたいと思います。これと対をなす環境へのやさしさについては、既に、世界中でモデル都市が生まれ、また、政策も世界各国で共有されつつあります。一方、アクティブエイジングについては、世界中を見渡しても完成したモデルというのはありません。その意味で、行政的にはより難しい課題です。この背景には、世界の社会課題解決をリードするアメリカがまだ若い国であることも一因と言えます。我々は、高齢化先進国として、超高齢化社会に対する洞察をもっと深める必要があるだろうと思います。その際、単に高齢化率が上昇しているという表面的な話だけでは施策を十分に検討することが出来ません。少なくとも、都市の高齢化、独り身の孤独な高齢者の方々の増加、転倒とうつの強い

関係、健康寿命の大幅な延伸（モアライフ）、ITに慣れた高齢者の増加など、もっと質的な視点で変化を考察する必要があります。その結果、いろいろな課題やニーズが見えてくることになります。

また、超高齢化社会の在り方については、生活の多様な側面を統合してそれを考えることが重要だと考えます。家庭での生活、移動、交流、仕事、学習、医療介護ケアなどは、高齢者の方から見れば、それぞれ生活の一場面に過ぎません。特定の場面だけ改善されてもアクティブな生活は難しい。例えば、外でよい仕事の機会があっても、身体機能の若干の低下を補う移動の手段がなければ、その仕事には意味がありません。生活の場面がつながっているということを前提に、統合的な視点でプランを考えていく必要があると思います。詳しくお話する時間はありませんが、我々は、生活の主要な側面にバランスよく「高齢者標準」の考え方を導入することを提唱しています。

最初にお話しましたが、こういったことは部署を超える話です。公園緑地課の方も、よりよい超高齢化社会づくりに重要な位置づけを担っています。例えば、高齢者の方が公園でふらっと座って休んで、子どもの姿を見ながらリラックスするというようなことは、生活の重要な一場面だと思います。住宅や医療、子育て、環境へのやさしさなど、アクティブエイジングと他のテーマとが重なっている部分も意識しながら、次の社会がどうあるべきか、それに対する行政サービスはどうあるべきかということを考えていく必要があると思います。

よりよい未来像を選択するために

未来を選ぶ上でどんな選択肢があるかなど

は、大体わかってきているのですが、実際には、個々の国民や企業にとって選択権がない状態になっているものもあります。住民一人ひとは、合意形成をしたり、制度をつくったり、広く社会から必要な資金を集めることは困難です。これらを担う政治と行政に対し、難しいことについても社会との合意を形成したり、新たな制度などを導入したりといった積極的な行動が待たれています。それによって、早めに様々な選択ができれば、無理なく移行の準備も出来て、よりよい未来をつくれると思います。

以上、「俯瞰」をキーワードに皆さんのお仕事、行政に関連するお話をさせていただきました。最後に、区政の企画立案や意志決定

を支援するシステムづくりを提案したいと思います。ここまで述べたように、よりよい未来社会を構想し、そこへリードしていくためには、技術・アイデアに関する知識と区民の望むところを把握する必要があります。職員にも時間の限界があり、世の中にあふれる情報を把握、処理しきれません。幸福指標に関する調査をはじめ様々な調査結果等や、日頃、区の職員が調べたことを関連づけて情報システムに格納し、目的、課題等に応じてそれを現場が簡単に利用できるような仕組みをつくってはどうか。国でもまだそうしたことは出来ていませんが、仕組みをつくることで、より豊かで確かな情報を持って企画や意志決定が出来るようになると思います。

RILAC ライブラリー 全国の書店で絶賛発売中！

『あたたかい地域社会を築くための指標—荒川区民総幸福度 (グロス・アラカワ・ハピネス：GAH)—』 平成22年5月刊行

編者 荒川区自治総合研究所 発行 八千代出版
定価 700円(税込)

誰もが幸福を感じられるような地域社会「幸福実感都市」を目指すその取り組みを紹介

○主な内容

- 「なぜ、いま幸福度指標が問われるのか」
- 「荒川区民総幸福度 (GAH) とは何か」
- 「荒川区民総幸福度 (GAH) のこれまでの取り組みと今後の展望」



『子どもの未来を守る 子どもの貧困・社会排除問題への荒川区の取り組み』 平成23年11月刊行

編者 荒川区自治総合研究所 発行 三省堂
定価 840円(税込)

普段は見えにくい子どもの貧困・社会排除問題に地域社会はどう立ち向かうのか

○主な内容

- 「『子どもの貧困・社会排除問題』への荒川区の取り組み」
- 「専門的な視点から見た『子どもの貧困・社会排除問題』」
- 「特別対談 阿部彩×西川太一郎」



『地域力の時代 絆がつくる幸福な地域社会』

平成24年9月刊行

編者 荒川区自治総合研究所 発行 三省堂
定価 840円(税込)

地域力を次世代に継承していくための荒川区の取り組み

○主な内容

- 「なぜ、今、地域力なのか」
- 「荒川区の地域力」
- 「これからの地域力」



平成 23 年度事業報告

平成 23 年度の当研究所の主な活動内容は以下のとおりです。

- (1) 荒川区民総幸福度 (GAH) に関する研究プロジェクト
 - ・ 中間報告書公表
 - ・ 研究会 3 回、ワーキング・グループ 29 回開催
 - ・ 「G A H N E W S」の発行 (No.9 ~ No.11)
 - ・ 『あたたかい地域社会を築くための指標』第二版第二刷の発行 (平成 24 年 2 月)
- (2) 子どもの貧困・社会排除問題研究プロジェクト
 - ・ 最終報告書公表
 - ・ 研究会 1 回
 - ・ 『子どもの未来を守る』発行 (平成 23 年 11 月)
- (3) 地域力研究プロジェクト
 - ・ 研究会 3 回開催
 - ・ 『地域力の時代』発行準備
- (4) 親なき後の支援に関する研究プロジェクト
 - ・ 研究会 2 回開催
- (5) CS と職員のモチベーションに関する研究プロジェクト
 - ・ 研究会 4 回開催、ワーキング・グループ 5 回開催
- (6) 第 3 回荒川区自治総合研究所区民フォーラムの開催
 - ・ テーマ「幸福について ―個人の幸福、社会の幸福」
 - 講師：広井良典氏 (千葉大学教授、地域力研究会客員研究員)
 - 日時：平成 24 年 1 月 23 日 場所：サンパール荒川 小ホール
- (7) 荒川区職員ビジネスカレッジとの連携講座 (1 回)
 - ※詳細は本ニュースレター 19 ページから 23 ページに掲載
- (8) ニュースレター「RILAC NEWS」の発行 (No.7 ~ No.9)
- (9) ホームページの運営
- (10) 他自治体、議会、研究機関、報道関係等の視察・取材等対応
- (11) 学生向け講義、他自治体での講演会に講師として参加し、区や研究所の取り組みを P R
- (12) 理事会・評議員会の開催

RILAC NEWS No.11 (平成 24 年 12 月発行)
編集・発行 公益財団法人荒川区自治総合研究所 (RILAC)
住 所：荒川区荒川 2 - 11 - 1
T E L : 03-3802-4861
F A X : 03-3802-2592
U R L : <http://www.rilac.or.jp/>
メール：info@rilac.or.jp

